

平成26年度

神奈川県 放送教育研究協議会・視聴覚教育連絡協議会

合同夏季特別研修会

研究主題

自ら考え 自ら学び 未来を切り拓く子どもの育成
～豊かな心と確かな学びを育む教育メディアの活用～



主催 神奈川県放送教育研究協議会
神奈川県学校視聴覚教育研究協議会
NHK 横浜放送局
主管 横浜市学校視聴覚教育連絡協議会
共催 横浜市教育委員会
後援 神奈川県公立中学校長会・神奈川県公立中学校教育研究会
神奈川県公立小学校長会・神奈川県公立小学校教育研究会
平成26年7月31日(木)

【会場】横浜市開港記念会館

日程

9:45	10:15	12:00	13:30	16:00
受付	全体会		昼食	①放送教育 ②視聴覚教育 ③情報教育
	開会行事	基調講演		

I 全体会

(1) 開会行事

- ① 開会の言葉 神奈川県放送教育研究協議会 会長 坂庭 修
- ② 主催者挨拶 横浜市学校視聴覚教育連絡協議会 会長 赤村 晋
- ③ 来賓挨拶 横浜市教育委員会事務局 指導企画課調整担当課長 平 久 様
- ④ 来賓紹介
- ⑤ 挨拶 神奈川県学校視聴覚教育研究会連盟 理事長 松本 剛
川崎市学校視聴覚教育研究協議会 会長 横田 不二夫
相模原市立小中学校視聴覚教育研究会 会長 宮内 裕之
- ⑥ 閉会の言葉 神奈川県学校視聴覚教育研究協議会 会長 田中 公明

(2) 基調講演

演題「メディアとともに広がる子どもの学び」

講師 武蔵大学教授 中橋 雄 先生



Ⅱ 分科会(選択講座)

☆第1講座 放送教育

提案者	主題	助言者
① 黒田 俊介 (川崎・富士見台小)	子どもの理解を助ける放送教材の活用	小松 良輔 川崎市立金程小学校校長
② 岡田 貴彦 (横浜・茅ヶ崎小)	思いを伝え合い、学びを深める放送教材 ～NHK 学校放送 「いじめをノックアウト」を活用して～	

運営 佐野 幸彦 (横浜・三ツ境小)

司会 福山 創 (川崎・平小)

記録 細川 直弥 (川崎・梶ヶ谷小)

☆第2講座 視聴覚教育

提案者	主題	助言者
① 山村 泰弘 (横浜・小山台中)	中学校社会科における 視聴覚機材の活用	松田 裕 横浜市教育委員会指導部 指導企画課主任指導主事
② 吉田 圭一 (横浜・東汲沢小)	ICTの強みを考えた授業デザイン	

運営 近藤 睦 (横浜・港北小)

司会 伊吾田 政宗 (横浜・茅ヶ崎中)

記録 飯田 慎也 (横浜・南ヶ丘中)

☆第3講座 情報教育

提案者	主題	助言者
① 井上 有希 (相模原・小山小)	授業実践におけるICT機器(タブレット 等を用いた)の効果的な活用 ～子どもたちが“分かる”授業をめざして～	竹鼻 直樹 相模原市 総合学習センター
② 武井 三也 (横浜・鴨志田緑小)	情報化社会を生き抜くための 情報モラル教育	

運営 藤原 直樹 (横浜・西富岡小)

司会 小野寺 明彦 (相模原・清新小)

記録 佐藤 司明 (相模原・大島小)





神奈川県放送教育
研究協議会
会長 坂庭 修



神奈川県学校視聴覚
教育研究協議会
会長 田中 公明

平成26年度の神奈川県放送教育・視聴覚教育合同夏季特別研修会は、平成26年7月31日に横浜市開港記念会館を会場として開催することができました。

本研修会を開催するにあたり、企画、運営等にあたってくださった横浜市学校視聴覚教育連絡協議会をはじめとする多くの方々、また基調講演にてご講演をいただきました武蔵大学教授中橋様様に心より御礼申し上げます。

本年度は『自ら考え、自ら学び、未来を切り拓く子どもの育成～豊かな心と確かな学びを育む教育メディアの活用～』を研究主題とし、午前中は開会行事及び基調講演による全体会、午後は放送教育、視聴覚教育、情報教育の3つの分科会（選択講座）に分かれて、提案や研究協議を行いました。

中橋教授による基調講演では、「“自立”した学び、そして“協働”による学び、その上の新しい知を生み出す“創造”。これら3つの構造的つながりを保障するような教育のあり方が大切であり、これに資するICTの活用の仕方がある。そしてこれができるのは教師しかいない。」という学校現場に対する期待を込めたお話を伺いました。

午後の分科会は横浜市学校視聴覚教育連絡協議会、川崎市学校視聴覚教育研究協議会、相模原市立小中学校視聴覚教育研究会から充実した研究実践の成果を発表していただきました。

助言者からは「ICTによる教育効果は大きいですが、使うことが目的ではなく、あくまで授業のねらい達成のためのICT活用」を押さえて欲しいというお話がありました。

子どもを取り巻く情報環境が急速に変化していく中、この研修会で学び得たことが教育実践に生かされることを期待いたしまして、挨拶と本大会の報告とさせていただきます。

平成26年度の神奈川県合同夏季特別研修会が盛会裏に終わり、提案された先生をはじめ、運営に携わられた皆様も、一息つかれたのではないのでしょうか。

この合同夏季特別研修会（夏季特研）は川視協・浜視連・相視研・県学視連が交互に運営を担当し、本協議会および神放協合同行事として夏季休業期間中に開催される全県対象の研修会です。今年度は浜視連（横浜市学校視聴覚教育連絡協議会）の皆様が中心となり、県内で放送教育・視聴覚教育に携わる皆様、また、今年度は横浜市教育委員会の共催をはじめ、神奈川県内の公立小中学校校長会、小中学校教育研究会のご後援により、大きな成果を挙げました。心より感謝申し上げます。

午前中に行われた全体会では、多くの来賓の皆様にご臨席賜りましてありがとうございました。続いての基調講演では、これからの私たちの研究の指針となるお話を伺うことができました。

午後からの選択講座では、各講座とも2本の提案があり、幅の広い研究を行うことができただけでなく、それぞれの地域での研究のあり方などの交流をすることができました。提案をしてくださった先生方、助言・司会・記録などに携わった先生方、お忙しい中貴重な場をつくっていただけたことを感謝いたします。

今回の夏季特研は、県内4団体に所属することのできない先生方が参加できるようにと、小学校・中学校の校長会や教育研究会のご後援を得て案内をお届けしてまいりました。県内に在職し放送教育・視聴覚教育研究に携わりたい、研修会や研究大会参加の機会を知りたいという先生方にお知らせできたことは、良かったのではないのでしょうか。

最後になりますが、この夏季特研が、参加された先生方にとって、明日の授業づくりの参考となることを願ってやみません。

「メディアとともに広がる子どもの学び」

武蔵大学教授 中橋 雄

記録 横浜市立羽沢小学校 鳥井 裕子

背景

国の方向性は、知識基盤社会・情報化する社会・グローバル化する社会である。その社会で求められる力を育むための教育とはどうやっていけばいいのか。

学習指導要領総則から

基礎・基本を活用して課題を解決することが学力として重要になってきた。我々の社会は、答えが一つに決まらないような問題ばかりで、思考力・表現力・判断力を育てる場面が学校教育でも必要だとしている。「主体的な学習」「個性を生かす教育」「言語活動の充実」が大事である。

学校放送番組にも変化が

その象徴的な番組が「考えるカラス」で、考え方を学ぶ番組である。最後にどうなるかは言わないのが学習意欲につながる。授業の中でもそういうプロセスでやっていくと、子どもたちの中でもイメージが変わっていく。授業の中で実証していくような番組である。しかし、授業時間は限られているので、自由に探求させる時間が少ない。その突破口になる実践が生まれれば教育課程も変わってくるだろう。

現代社会に求められる学力とは

習得・活用・探究、それぞれの学力に求められる教授の方法は異なると言われている。学習活動のデザインの工夫があるのではないかと、どのようにその力を育むのか。いくつか紹介したい。

「教育の情報化ビジョン」

文科省から公開されている。学びのバリエーションに応じたICTの活用方法が示されている。

一斉学習では、デジタル教科書などでの知識の獲得、デジタルノートでの表現がある。教師の画面に子どものタブレットが表示され、子ども全員の様子を見ることができる。思考を可視化し把握すれば、適切な支援ができるはずである。デジタルノートに子どもの考えを保存し、ポートフォリオを貯めていくこともできる。

個別学習では、ドリル学習や、思考を深めるために、興味・関心に従って調べる辞典のようなものがある。

協働学習では、発表で色々な考えを知り、自分が考えつかなかったことに触れることがある。その時に色々なことを示すツールがあると便利である。学校だけでなく、他校や専門家を通じて交流することによって得られる学びもある。

携帯情報端末で情報収集したり、観察した結果を記録し、書き込みをしたりできる。デジタルの良さは、試行錯誤が無限にできることである。

学びのイノベーション事業で掲げられたキーワード

「自立」「協働」「創造」

協働するにも個性、能力が必要で、多様な個性を伸ばしていく教育が重要である。個性を伸ばせば、教育が保障されている中で協働が非常に意味をもつ。違うからこそお互い相互作用をすることで、新しい課題を解決していくことができる。それぞれの強みを生かして、支え合い、社会に参画していくことを協働と言う。

さらにつながっていくことに「創造」がある。新たな価値を創造し、新しい知を産み出していく。教科書の枠を超えて、新しい法則を発見したり、提案をしたりする。新しい知を生み出すには協働が必要である。

「自立」「協働」「創造」はそれぞれ繋がっていて、違う。それぞれを保障するような教育のあり方を考える必要があり、ICTを教育に活用する仕方を考える必要がある。どういう力をつけたいか教師がしっかりもっておく。



協働学習とは(私見)

答えが一つに決まっている、答えが一つに決まらない、そして両方を含んだ協働学習がある。

正しい答えを導き出せる学習者が、導き出せない学習者に考え方を教えるような協働学習がある。できる子は、説明することで理解が深まり、定着する。できない子は正しい答えを導き出せるようになる。一方、答えが一つに決まらない問いへの協働がある。最適解を求めるために、できるだけ資料やデータをもって納得させ、合意を形成していく。自分とは異なる考え方に触れ、ものの見方や考え方が広がる。

「知の獲得」「知の生成」を学習の中にデザインしていく。ICTが有効な部分は両方にある。

習得型の例

体系的な知を身につけるためにドリル学習がある。〇×で答えるものから、最近では学習の履歴が残り、繰り返しやったり、履歴を教師が見ることによってもう一度やり方を説明したりできる。電子黒板などと連動させて、それぞれの画面を巡回表示させ、相互参照させることによって、得意な子に聞きに行くツールとしても生かすことができる。画面を共有することによって、人と人の協働も生みやすくなる。





活用型の例

グラフの読み解きの事例だが、何のグラフか分からないグラフを提示して考えさせる。教科毎の関連や教科と総合の関連をもっと意

識していくことが活用型の授業として重要である。論拠を説明し、なぜそのグラフだと思ったかを書き込むことで説明を伴うような学習になる。

グループで話し合わせることもするし、クラス全体で共有しながら話し合わせることも活用していく。考え方をトレーニングするためのワークシートも、たくさん必要になる。そういう時に ICT を活用するのは便利である。

探求型の例

ガイドブック作りの例である。コンピュータを使うことによって、写真を取りこんだり、文章と組み合わせたりすることができる。

重要なのは、誰のために何のためのガイドブックを作るかということである。そのためにどういう写真を撮ってこないかと相手に伝わらないか、目的を達成するための手段を学び取ってもらいたい。これまであまり写真の撮り方などを学校教育でがっちりやることはなかった。どういう意図で使用するか判断基準になる。

現在日常的に使われているカメラだが、社会科見学に行き、後でレポートを作ると言われて、人に伝えるための写真が撮れるだろうか？ それに対してどういう解説を加えていくか、伝わるように、興味をもってもらえるような文章が書けるだろうか？

課題を解決する言葉の使い方などに学力感が向かっていることを確認しなければならない。ICTもそういう指導のために活用すべきである。試行錯誤することが簡単にできる、文章の練り直し、交流してアドバイスし合う活動がしやすい。そのために使わないと意味が無い。

例えば、ある子が作った画面を他の子の画面に転送提示し、手で見せると細かいところまで見える。途中で、良いものを全体に共有することもある。目的に応じた表現ができていないことをほめないと課題が解決する学習ができない。視点の持ち方、声のかけ方に工夫が求められる。

防災マップ作りの例でも手元に必要な材料、検討する材料があるのは議論を促すために重要である。

改善する後と前を提示することができるのもデジタルの良さである。記録を残すことによって、学習のプロセスを子ども達が改めて実感することもできる。学習のメタ認知をするためにも、視覚的な資料は重要である。

電子黒板をどう使うか

社会のグラフを提示するような時に、電子黒板をどう使っていくのが有効だろうか？ 単に大きくして見せればいいわけではない。子どもはグラフを見て、見た通りのことを言うことが多い。

しかし、大切なのはどんな意味を持っているかである。グラフの伝える意味や個々の情報の価値を吟味が出来ていない課題がある。ワークシートで工夫をし、論拠をもって書かせる。たくさんのロジックを共有することで、新しい発想も生まれる。活用の仕方の工夫のしがいもある。

学習とメディアとの関わり

読解と表現に関する基礎的な技能を身に付ける場としてメディアは存在している。題材を読んだり、表現をしたりが容易に出来る。

課題解決のツールとして、調べたりまとめたり伝えたりするための道具としてデジカメやコンピュータが使える。

社会システムとしてのメディアは、情報産業について学ぶようなものがある。

教師が活用する場合もあり、子ども達が活用する場合もある。メディアとは何かを学ぶ学習もある。相互に関連しあっている。

これからの研究課題

ソーシャルメディアの時代と言われていたが実感があるだろうか？ 2005年と2013年のコンクラーベの写真の比較がニュース



サイトにある。2013年の写真は、みんながカメラを持っていて、Twitter等にすぐ流している。そんな時代である。

その中で学校教育にも変化がある。タブレットが入ると何が便利かと言うと、映像制作などが簡単にできる。6年生が1年生に向けて啓発するようなビデオを作っているが、タブレットだと画面も大きく、話し合ったり、試行錯誤したりする活動がやりやすい。

この授業では、動画共有サイトにアップする時に気をつけなければいけないことは何か問い直している。自分たちが楽しむためのビデオではなく、多くの人が見るものである。子ども達は自分で動画サイトを見るし、UPだってできてしまう。そういう授業につなげていくのは、今後のあり方を考えていくのに重要であると思う。

ニュースサイト

インターネットでニュースサイトを見る人も多いと思う。下の方を見るとコメントがたくさんついている。子ども達も目にする。これに対してどう考えるか、それぞれの立場の人がどう思っているか、こういうことを読み取り、自分たちも発信していく立場かもしれないので、責任をしっかりとっていただければいけないことを考えさせる。社会的なつながりというものに位置付くメディアへの関わり方を教育に取り入れていく必要があるのではないのか？

子どもの学びと教育メディア

「学習環境デザイン」「授業デザイン」「指導方略」は、どんな学力が今求められているか、どんな学力を子ども達に身につけさせたいのかの意識なしに、ICTの活用はありえない。当たり前のことだが、今一度確認したいと思う。

子どもの理解を助ける放送教材の活用

提案 川崎市立富士見台小学校 教諭 黒田 俊介
司会 川崎市立平小学校 教諭 福山 創

助言 川崎市立金程小学校 校長 小松 良輔
記録 川崎市立梶ヶ谷小学校 教諭 細川 直弥

1. 提案要旨

多くの情報を持っている放送教材の良さをいかすため、利用する意図をしっかりと持ち、視聴の視点をもたせることで、教科の



観点を高めていきたいと考えた。理科の観察では、「授業時間内に観察対象の変化が進まない。」「イメージの出来上がっていない子どもに対して言葉だけでは伝わり難い。」「授業進度と観察対象の変化が合わない」「苦手意識があり意欲的に取り組めない」などの問題を改善するため放送教材を活用した。そうすることで、観察した事だけで無く、予想や比較といった観察と観察の間を結ぶ意識を持つ子どもが増えていった。また、身の回りの動植物に興味を広げることもできた。学び合いの場面では、言葉だけでは伝え難かったり、伝わり難かったりした部分を放送教材が補い、互いに納得出来たという場面もあった。

また、視聴の際の教師の立ち位置も考え、画面も子ども達も見られる位置に立つことにした。これにより、どの場面でもどのような反応をしたかが見えるようになり、子ども達への声かけを行う上で重要だと感じた。これは子ども達の後ろから番組を見ていた時とは別のメリットだと思う。

このように視聴の視点やタイミングを意識し、どこで活用するかを考えることが授業づくりへとつながっていく事が感じられた。また、放送教材と実体験がリンクすることで、子どもの学びを豊かにしていくのではないかと課題も見つけることができた。

2. 協議内容

・教師の立ち位置を変えたことによって得られた反応やつぶやきはどのようなものがあったか。

→実際の授業で観察出来ていない部分の場面では大きな反応があった。また、理解が不十分だと感じていた

部分を再度視聴することで、納得できたような表情がみられた。

・放送教材だけで学習を終えず、実物に関心を持たせていたが、どのような実践をしたのか。

→視聴後に疑問を持ち、再度観察に行ったり、クラスで飼育しているものと比較したりしていた。

・放送教材の見せ方について実際にどのようなパターンで見せたのか。

→全てを流したり、一部分を止めたり、何度も繰り返したりと意図や狙いによって異なる。



3. 指導助言

授業デザインとは、事前の計画であり、意図を明確にし、狙いをもつことである。しかし、実際の授業は、計画通りに実行しようとするとうまくいかない事が多く、一度リセットして子ども達をよく見て進めるのが大切である。そのため、授業中の子ども達の発言、様子、状況の変化に柔軟に対応し、自覚的なリフレクションを行うなど広い意味で授業デザインを捉えておく必要がある。そのため、今回の提案にある教師の立ち位置は重要である。子どもの反応を見て、その後の学び合いを引き出すことで放送教材が有効に活用されていく。放送教材と実物の比較をしながら考えたり、発言を聴いて・見て・つなげたりすることが大切。個々の発表を順番につなげるだけではなく、前の発言を聴いて、自分の考えと比べて発言をすることで学び合いが(より)深まる。「放送教材」と「実際の観察」と「学び合い」を連動させた授業デザインをしていくことが重要であり、そのことによって学びが豊かになっていく。

思いを伝え合い、学びを深める放送教材 ～NHK 学校放送「いじめをノックアウト」を活用して～

提案 横浜市立茅ヶ崎小学校

教諭 岡田 貴彦

助言 川崎市立金程小学校

校長 小松 良輔

司会 川崎市立平小学校

教諭 福山 創

記録 川崎市立梶ヶ谷小学校

教諭 細川 直弥

1. 提案要旨

昨今社会問題化しているいじめについて、自分の事として考え、みんなで議論することで初めていじめのない望ましい人間関係を築くことにつながると考えた。「いじめをノックアウト」は、子ども達の視点で話し合いが出来るようにつられていて、放送回ごとに様々な角度でいじめをとらえることができる。そのため、児童の実態と教師の願い、身に付けさせたい力を総合的に考えて、「話し合いが身近に感じられる内容か」「生活において必要感があるか」という視点で視聴回を複数選択した。ワークシートも番組HPに掲載されているが、参考程度として設問数を絞り、話し合いの時間を確保に努めた。



こうすることで、毎回同じ学習の流れで話し合い活動に取り組むことができ、安心感をもって思いを伝え合う姿が見られた。

また、子どもの実態を考え、視聴する目的を明確にもって意図的に視聴計画を立てていくことで子どもの思いを引き出すことができ、自分の考えをもって話し合いに取り組むことで、互いの共通点や相違点に気付きながら話し合いができた。これは、設問数を絞ったことでじっくりと問題に向き合うことが出来たことも関係していると考えられる。しかし、適当な実践時期が何時なのかという課題も見つかった。

2. 協議内容

・子どもからの本音を引き出すための具体的な手立てや取り組みは。

→紙ベースには本音を書きやすいので、ワークシートや発問を工夫している。発表し難いものは発表しなくても良い。自分と重ねすぎないで感情的にならないように指導している。

・適当な実践時期が課題と感じたのはなぜか

→中学年では、素直に番組をとらえているため、素直

な反応が出やすいと思う。高学年では多様な意見が出たが、実体験を重ねすぎて感情的な発言になったり、意見が言い難い環境になったりしたため。



3. 指導助言

ワークシートに「ず〜っと」や「い〜っぱい」など子どもの背伸びしていない素直な思いが書かれている。これは、今回使った放送教材が子ども達なりの視点で共有化が図りやすい構成になっていると共に提案者の教材分析の確かさでもある。子ども達なりの視点がなければ、「認め合い」や「共感」や「深まり」や「仲間意識」は生まれにくい。こうした放送教材の良さを活かすと共に子ども達の話し合いの中に有効に活用しようとする教材分析がきちんと出来ていた。

また、学級経営の素晴らしさと、放送番組としての完成度の高さがより効果を上げている。特に、「こころ」を育む内容の場合、放送教材の継続視聴の効果は大きい。提案の中の、「安心感をもって思いを伝え合う姿が見られた。」という部分は、少しずつ自信をもって自分の意見が言えるということで、学習の仕方も身につけ、そうした安心感が根底にあって自分なりの思いを素直に表現できたのではないかと。

さらには、考える時間をしっかりと確保するために、設問数を絞ったり、子どもの実態にあった視点を考えたりするなど、本音で語って考えることのできる発問や授業の組み立てなどが大切であり、授業デザインのポイントとなる。

中学校社会科における視聴覚教材の活用

提案 横浜市立小山台中学校 教諭 山村 泰弘 助言 横浜市教育委員会指導部指導企画課
司会 横浜市立茅ヶ崎中学校 教諭 伊吾田 政宗 主任指導主事 松田 裕
記録 横浜市立南ヶ丘中学校 教諭 飯田 慎也

1. 提案要旨



視聴覚教材 DVD や校内LANを利用した動画配信システムによる動画を見せながらの授業展開では、生徒の思考力の育成にはつな

らないのではないかと疑問から、静止画の視聴による授業実践を行った。動画の場合、音声やテロップによる解説が入る。生徒がそれを見ながらワークシートに記入する方法では単なる穴埋めに過ぎず、生徒の思考力向上の判断は難しい。しかし、静止画を利用することでいくつものメリットがある。指導に適した画像が入手しやすい、OHC を利用することで動画配信システムサーバー(以下サーバー)への入力省ける、画像の加工が容易、などである。

授業後の生徒の反応はあまり好評ではなかった。生徒からは「動画の方がよい」「静止画は見ていると疲れる」などの感想があがった。しかし、見ていて疲れるということは、それだけ注意深く資料を見ている、それにより生徒が考えているということである。静止画視聴による思考力の育成には効果があると考えられる。

2. 協議内容

○社会科以外の資料はサーバーにどのくらい入っているのか？

⇒社会科については、自分が必要なものをその都度入力しているが、作業に時間がかかるため、極力計画的に行っている。他教科については、操作方法を各教科担当に説明し、適宜入力してもらっている。また、学校行事の写真や動画も入力している。

○小学校では各担任が全教科の授業を行うので、サーバーに教科ごとにフォルダ分けし、本棚のような感覚で利用している。しかし、デジタルデータ化できない資料もあるため、今回の実践は参考になった。

○提案者より:サーバーの映像がモニターに映らないこ

とがあった。HDMI ケーブルコネクタに入り込んだ埃やチョークの粉が原因だったようである。掃除機で掃除することで解決した。また、不調の間は映像を DVD に落として映していた。

○思考を深めるために、静止画の見せ方でどのような工夫をされたか？

⇒静止画の一部を拡大して見せたが、逆に生徒には分かりづらかったようである。多くはそのまま見せた。各生徒が見て感じたことを全体で共有することで、思考が深められれば良い、必ずしも正解にたどり着かなくても良いと考えている。

○生徒は実体験をしていないことが多いので、静止画を見ても正解に至らないことは自然なことである。



3. 指導助言

現在、各教科で教材になり得る資料はインターネットや『NHK for school』など、数多くある。そのため、今の教員に求められるのは資料を作成する力よりは、これらの資料の中から授業展開する上で効果的かつ生徒にインパクトを与えられるような資料を選択する力である。

今回の授業で用いられた静止画は、生徒の興味・関心を引くには効果的なものであった。ここから生徒の知識・理解を深め、思考し、調べ、それをお互いに話し合い、まとめ・発表し、次の関心・意欲につなげられるような学習スタイルの確立を図って欲しい。

動画配信システムの利用や資料の作成をするにあたっては、著作権の有無を必ず確認してから制作することが肝要である。

ICTの強みを考えた授業デザイン

提案 横浜市立東汲沢小学校 教諭 吉田 圭一 助言 横浜市教育委員会指導部指導企画課
司会 横浜市立茅ヶ崎中学校 教諭 伊吾田 政宗 主任指導主事 松田 裕
記録 横浜市立南ヶ丘中学校 教諭 飯田 慎也

1. 提案要旨

本提案では、ICT 機器を用いて、教科の学習目標の達成と児童による ICT 活用技術の向上を目指し、授業実践を行った。単元は4年生社会科の「吉田新田」。まなボード、デジタル吉田新田を用いてその概要をつかみ、そして横浜歴史博物館のエドューケーターの話聞く中で児童一人一人に疑問点や課題を考えさせた。その後自分で資料を集めて疑問点を調べ、伝えるチカラPRESSでプレゼンテーション資料を作成させ、グループごとに発表させた。



今回の実践では、ICTを取り入れることで学習活動の楽しさを味わい、達成感や自信が生まれた児童が多く見られた。これは学習意欲

を持続させることにつながると考えられる。また、プレゼン資料を作成する中で、「より分かりやすく資料を作るにはどうしたらよいか」と意識する児童が増え、生徒同士の関わり合いも深まった。しかし、資料作成時間に個人差があり、授業時数が足りなくなる可能性や、児童からのアウトプットが減ってしまったことが課題として残った。

2. 協議内容

○教育支援ソフトについてももう少し詳しく教えてください。
⇒写真を組み込んで新聞やスライド、ポスターなどを作る、また動画を組み込んで番組作成もできる。学年に応じて作業難易度を変え、さらに教員も資料作りが可能である。

○今回の実践は、児童がグループ単位で学習を進めるスタイルであり、協働的学習としては有効である。また、作業用PCの配置は生徒間でコミュニケーションがとりやすい工夫がされている。児童・生徒がコミュニケーションをとれるような活動をするためにはICTの活用が必要である。

○目的意識をもって、広がりのある授業実践であった。

⇒クラスの中だけで完結してしまう授業ではなく、エドューケーターも含めた形で展開できた。

○ICT機器の活用方法について、児童に年間を通してどのような指導をされたのですか？

⇒PCの操作方法やプレゼンの進め方に慣れさせるため、他教科や学級活動でも取り入れて機器に触れる機会を増やした。

○資料作りではアウトプットは減るが、資料選択の過程があるので良いと思う。評価について、協働作業の場合はどのように行うのか？

⇒グループでの評価の場合は、一人一人に振り返りカードを書かせ、それを評価した。

3. 指導助言

昔はビデオやCDなどで、教師から児童・生徒に一方的に伝えることが主流であったが、今はインターネットなどによる双方向通信、情報を相互に伝え合うことが主流となっている。

今回の授業はとても綿密な計画が立てられていた。また単元指導計画に沿って「つかむ→調べる→まとめる→広げる」の構成がしっかりできていた。児童が資料を作成した際、どのような資料が使われたのかを学年の資料としてストックしておき、来年同じ単元の授業を行うときに参照し、より良い授業を作って欲しい。また、横浜市ではICT機器学習プログラムとして、ローマ字入力やPC操作などの練習を年間10時間程度(小1～小3)するようにお願いしている。

ICT機器を使用する上で、トラブルは避けて通れない。これに対応するために、教員2名体制で行うことが望ましい。今後タブレット導入により、無線LANによるトラブルも考えられる。



授業実践における ICT(タブレット等を用いた)の効果的な活用 ～子どもたちが“わかる”授業をめざして～

提案 相模原市立小山小学校 教諭 井上 有希
司会 相模原市立清新小学校 教諭 小野寺 明彦

助言 相模原市総合学習センター 竹鼻 直樹
記録 相模原市立大島小学校 教諭 佐藤 司明

1. 提案要旨

授業でタブレットPCを効果的に活用できれば、児童がコミュニケーションを図る際の有益な手段のひとつとなるのではないかと考え、2つの授業実践を行った。

授業実践① 家庭科「玉結び、玉どめ」

タブレットPCに「玉結び、玉どめ」の動画をダウンロードしておき、児童が自由に使うことができるようにしておいた。子どもたちはタブレットPCを活用し、個々の課題に対して主体的に学んでいた。

授業実践② 図画工作科「パチリいただき 身の回り ～みつけてみよう〇△□～」

子どもたちは、いつもと違う視点・見方で教材をとらえることができた。子どもたちが主体的に学ぶ姿がみられた。

2. 協議内容

○タブレットPCとあるが、ノート型のタイプか？

・今回の授業ではノートPC型のタイプのものを使用した。

実践では4台使用したが、相模原市総合学習センターから貸与されたものである。

○今回の実践では、個々に応じて見たい・知りたいものを見ることができてよかった。また、担任・保護者ボランティア・タブレット PC と学ぶ選択肢が広がり、子どもたちが主体的に学ぶことができていてよかった。質問だが、2つの実践で

事前指導をどのようにしたか教えてほしい。

・「貸与されているものを大切に扱うこと」を事前に指導した。子どもたちどうして使い方を教え合って使っていた。

○貸与されたタブレットPCが4台であったが、使う際に問題点がなかったか？

・4台は少なかった。今回の図工の実践では、写真の加

工などで使えるアプリがあればもっと活用できたのではないかと考える。

○情報交換としてタブレットPCを導入している学校に実践を聞く

・昨年度、タブレットPC6台を導入した。以前はビデオ機器を体育のマット運動やとび箱などで使っていたが準備などが大がかりであった。タブレットPCでは、同じめあてをもった子どもたちで撮影しながら振り返ることができている。

・相模原市小学校⇒タブレットPC6台導入済み。OSがWindows8だが、他の機種に比べると使いづらいと感じる。

・横浜市小学校⇒iPod8台導入している。視聴覚担当として、台数の問題、管理の問題、使う先生の技能・知識が課題であると考ええる。

3. 指導助言

タブレットPCは、パソコンや実物投影機、デジタルカメラ、ビデオ等の機能も併せ持つことから、4項目を1台で達成することができる。しかし、タブレットPCは、あくまで授業の「ねらい」にそった1つの道具にしか過ぎない。今回の実践は、適切に活用している好事例である。家庭科の実践では、玉結び、玉どめができることが目的である。児童がつまずくところ、個人差がある子どもたちがいるなかで、先生一人では対応しきれない。タブレットPCがそれぞれのサポートをしている。わからないことを学ぶツールとして、目標を達成することに役立っている。

課題としては、機器整備の遅れ、使う人の経験が必要である。

ICT機器は、最初から上手に使いこなすことは難しい。しかし、必要だと思ったら、失敗を恐れずに活用し続けることが大切である。それが授業力の向上につながる。



情報化社会を生き抜くための情報モラル教育

提案 横浜市立鴨志田緑小学校 教諭 武井 三也
司会 相模原市立清新小学校 教諭 小野寺 明彦

助言 相模原市総合学習センター 竹鼻 直樹
記録 相模原市立大島小学校 教諭 佐藤 司明

1. 提案要旨

近年、情報化社会の進展は日々加速する一方である。子どもたちを取り巻く環境も、年々大きく変化し、小学生が携帯電話を所持し、日常的にインタ



ーネットを利用する機会も増えている。一方で、子どもたちの情報モラルが十分であるとは言い難い。情報化社会を生き抜くために情報モラルを育成し、子どもたち一人ひとりが身につけ活用できる必要があると考えた。また、情報モラル教育で「相手意識」を培うことで、日常生活におけるコミュニケーション力の育成にもつながると考えた。

2. 協議内容

○相模原市では、全ての教員が情報モラルを指導できるよう情報モラルハンドブックを作成し、小中学校に配布し活用している。小学校1年生から中学校3年生まで体系的なカリキュラムが組まれている。学校によっては情報モラル週間、月間を設定し活動している。質問だが、横浜市や勤務校では情報モラルに関する取り組みをしているか？

・現在の勤務校では少ない。前任校では学年の中で内容を話し合い、指導していた。横浜市では ICT 横浜スタンダードに応じて実践しているが、情報モラルでは足並みが揃っていない現状である。

○今回の実践では、「情報モラル」、「日常モラル」と2つの言葉が出てきたが、「モラル」という概念の中に「情報モラル」という1分野があるという考えのほうがよいのではないか。ICTの意識は、日常的な人間関係の中で培われていかないと相手が見えなくなるのではないかと考えた。

○情報モラルというと、以前は子どもたちが被害者になる場合を想定した指導が多かったが、現在は加害者にもなり得るという双方向の立場で指導しなければなら

い。また、保護者へも情報モラルとは何なのかを伝えていかなければならないと感じる。

○質問だが、実践2で「相手への影響を考えて行動しようとする児童を育てたい」と考えていたのにうまくいかなかった原因は何だと思うか？

・導入や発問で、相手へ意識を向けさせることができなかったのではないかと。

3. 指導助言

情報機器の急速な普及にともない、社会全体で日常的に利用されている。インターネットは子ども大人も関係なく、同じ環境で使われている。したがって、情報モラルに関する教育を、適切・計画的に指導する必要がある。情報モラル教育は、情報社会で適正な活動を行うための基になる。

道徳の時間に情報モラルに関する授業を展開する事が多いが、道徳は「道徳的価値の自覚、自己の生き方についての考えを深める、道徳的実践力の育成」をめざすもので、それは情報モラル教育においても変わるものではない。しかし、情報機器の使い方や対処法などを主眼として指導することは適さないことも注意してほしい。



今回の実践では、道徳の時間の「ねらい」を的確に定めている。「ねらい」に迫る教材として、日常生活に関わるもの、情報モラルに関わるもので実践している。情報モラルに関わる教材を使った実践では、相手意識が希薄になった。これは特性の1つとして捉えていいと考える。授業者の発問や迫り方によって、教材が有効なものになるかどうかは鍵である。また、実施する時期もポイントになる。そのためには、情報モラル教育のカリキュラム構築と、散発的にならぬよう一貫性をもった確実な実践が重要だ。

平成 26 年度

神奈川県 放送教育研究協議会 ・ 視聴覚教育連絡協議会

合同夏季特別研修会

参加者数

	人数
神奈川県	11
横浜市	82
川崎市	23
相模原市	20
合計	136

	人数
第 1 講座	49
第 2 講座	33
第 3 講座	54
合計	139

平成 26 年度夏季特別研修記録集 編集・発行

横浜市学校視聴覚教育連絡協議会 会長

横浜市立下郷小学校長 赤村 晋

編集委員

狩野 久幸 諏訪 浩 東森 清仁 鳥井 裕子